

波禮毘古命を始めお供の軍兵共は俄に生氣を失つて、昏睡の状に陥つてしまひました。その時に現はれた熊といふのは、熊野山の邪神の姿を變へたもので、全くその毒氣に當てられたものであります。

時に熊野に高倉下といふ者がありましたが、一口の太刀を奉りました。すると神倭伊波禮毘古命は忽ちにして生氣づかれまして、

あゝ長寝をしてをつたわい。

と仰せられて、太刀をお受取りになりますと、その太刀の靈德によつて、熊野山に荒れ狂ふてをつた邪神共は自ら倒れてしまひ、皇軍は悉く生氣を恢復することが出来ました。

神倭伊波禮毘古命は大そうお喜びになりました、高倉下を近く召し

寄せられ、

かゝる靈德のある太刀はどうして得たのか。とお尋ねになりますと、高倉下は、

その刀を得ましたのは、かういふ次第でございます。昨夜の夢の中に天照大御神と高木神（高御巢日神）とがお現はれになりました。建御雷神をお召しになり、「葦原中國は邪神共が荒れ狂ふて大そう騒がしい。吾が御子達もその毒氣に當てられて大分苦心してをるやうである。かの葦原中國は前に汝が平定した國であるから、今一度降つて共に力を協せて平定せよ」と仰せられました。すると建御雷神は、「私が降りませんが、先きに葦原中國を平



げる時に用ひました太刀がありますから、それを代りに降しませう。必ず國が平らぐに相違ありません。そしてこの太刀を降しすには熊野に高倉下といふ者がありますから、その者の倉の棟を穿つて倉の中に落とし入れませう」と申し上げられました。そして私に向つて仰せられますには、「今この太刀を汝の倉の棟から落し入れるから、朝目が覺めたらそれを取つて天神の御子に奉れよ」といふことでございました。翌くる朝早く起きて倉の中を見ますと、夢のお告げのやうに一口の太刀がありました。それで奉つたのでございます。

と申し上げました。神倭伊波禮毘古命は天神の御加護の厚きを感じせ

られると共に、高倉下にも有難いお言葉を賜はりました。さて神倭伊波禮毘古命は熊野をお立ち出でになりました、更に奥の方に進まうとなさいました。ところが或る夜夢の中に高木神がお現はれになつて、

天神の御子よ、こゝより奥の方へは無闇にお進みなさいますな。悪者共が澤山にをります。それで今天上より八咫鳥を遣はします。その八咫鳥が道案内を致しますから、後より従つてお進みなさい。とお諭しになりました。

翌くる日の朝になりますと、何處からともなく一羽の八咫鳥が金色の光を放つて飛んで来て、神倭伊波禮毘古命の弓の先に止まりました。



やがて八咫鳥はカアと一聲大きな聲で鳴き立て、奥の方へ飛んで行きました。高木神のお告げに随つて、その後からついて行かれると、吉野川の下流に出られました。ところが吉野川に築を架けて魚を捕つてをる者がありました。

汝は何といふ者であるか。

とお問ひになりますと、

私は國神で名は贊持之子といひます。

と申し上げました。この贊持之子といふのは鵜養部の祖先で、大和の阿陀の地に住んで鵜を使つて魚を取り、御膳部の事を掌つてをつたのであります。

そこより尙もお進みになりますと、吉野山の麓で尾のある人が井戸の中から出て来ました。尾のある人といふのは、恐らく獸の皮の剝いだまゝのものでも着てをつたのでありませう。

汝は何といふ者であるか。

とお尋ねになりますと、

私は國神で名は井冰鹿といひます。

と申し上げました。

神倭伊波禮毘古命は更に軍勢を従へ吉野山にお入りになりますと、又尾のある人にお出逢になりました。この尾ある人は岩を押分けて出て来ました。



汝は何といふ者であるか。

とお尋ねになりますと、

私は國神で名は石押分之子といひます。今天神の御子がお出でになると聞きましたから、お出迎へに參つたのでございます。

と申し上げました。

かうして行く／＼多くの土族共を従へて、やがて大和國宇陀といふ處にお出になりました。

宇陀の高城

さて神倭伊波禮毘古命は宇陀にお著きになりましたが、この宇陀には兄宇迦斯（兄滑）、弟宇迦斯（弟滑）といつて二人の兄弟がいました。

た。この地方の酋長で多くの部下を従へ、かなりの勢力を持つてをりました。そこで先づ八咫鳥をお遣はしになりました。

今天神の御子がこの地にお出になつた。汝等はおとなしくお仕へ致すかどうか。

と問はしめられました。

弟宇迦斯の方はよく道理の分つた男でありましたが、兄宇迦斯の方は自分の勢力を頼みにして、なか／＼亂暴な事を爲してをりました。

今八咫鳥の言葉を聞いても固より承知しませんでした。承知しないばかりでなく鳴鏑の矢を番へて待ち受けてをつて八咫鳥を射ましたが、幸にして矢は横にそれて中りませんでした。更に兄宇迦斯は皇軍が攻



めて来るのを待ち受けて撃たうと思つて、軍勢を集めようと致しましたが集めることが出来なかつたので、偽つて、

天神の御子にお仕へ致します。

と申し上げて置いて、早速大きな御殿を造り、その御殿の中に墜穴を設け、神倭伊波禮毘古命をお招きして待つてをりました。これは墜穴へ陥れようといふ計略であります。

この計略を知つて弟宇迦斯は、大急ぎで神倭伊波禮毘古命の許に参りまして、

私の兄の兄宇迦斯は天神の御子のお使を矢で射て追返して置いて、皇軍の攻めて来るのを待ち受けて撃たうと思つて、軍勢を集

めようと思しましたが、たうとう集めることが出来ませんでしたので、今度は大きな御殿を作り、その内に墜穴を設けて待つてをります。取り敢へずお知らせに参りました。

と何も彼も打ち明けてしまひました。

ところが神倭伊波禮毘古命は何知らぬ風をして、兄宇迦斯の許にお出でになりました。兄宇迦斯は新たに出来上つた御殿に御案内しようと致しました。その時道臣命と大久米命とが、兄宇迦斯にお向ひになつて、

貴様が作つた御殿には貴様が先づ入つて、吾が君をおもてなしする有様をして見せよ。



といはれましたが、固より素直に入る筈がありません。そこで太刀の柄に手を掛け、矛をしごき、弓に矢を番へて、御殿の内に追ひ立てられました。かくて兄宇迦斯は自分で作つた墜穴に落ち押機に壓されて死んでしまひました。

弟宇迦斯は兄と違つて心から従つてをつたのでありますから、兄の死を悲しみながらも、いろ／＼の御馳走を調へて皇軍をねぎらひました。神倭伊波禮毘古命が兄宇迦斯を討つてお詠みになりました歌、

宇陀の高城に鳴網張る、

我が待つや鳴は罹らず、

いすくはし鯨罹る、

前妻が魚乞はさば、

立爪稜の實のなけくを

幾許聶ね、

後妻が魚乞はさば、

枿實の大けくを、

幾許聶ね、

え、しやこしや (人を罵る意味の語)

あ、しやこしや (人を嘲り笑ふ意味の語)

この歌の意味は大和の宇陀の高い城に鳴網を張つて待つてをるが、鳴がかゝらないで大きな鯨がかゝつた。家にをる前妻が魚を下さいといへば、爪稜の木の実のやうに長く鯨を切つて澤山にやれ。又後妻が魚を下さいといへば、枿の實のやうに大きく鯨を切つていくらでもやれ。ア、よいぎまだ、アハ、、といふので、兄宇迦斯が自分の作つた墜穴に陥つて死んだのを罵り笑つた歌であります。



かくて神倭伊波禮毘古命は兄宇迦斯を討ち弟宇迦斯を従へて、宇陀の地をお立ち出でになり、忍坂といふ處の大室にお著きになりました。大室といふのは山腹などを横に掘つて作った大巖窟のことであります。この巖窟の内には多勢の悪者共がをつて待ち構へてをりました。ところがうまく悪者共を納得させて、大饗應を開かれました。そして悪者共と同數の力の強い人々に刀を佩かして宴席に出し、若し歌を聞いたなら一時にとつと悪者共を斬つてしまへ。と言附けて置かれました。悪者共はかゝるたくらみがあらうとは思ひませんから、飲んだり食つたりで大騒ぎの最中に、

忍坂の大室屋に、人多に來入り居り、人多に入り居りとも、みづ／＼し久米の子が、頭椎石椎持ち、撃ちてしまん、みづ／＼し久米の子等が、頭椎石椎持ち、今撃たばよらし。といふ歌が聞えました。そこで一度に刀を抜いて悪者共を殺してしまひました。この歌の意味は忍坂の大巖窟に多勢の人がをつても、元氣の充ち満ちた久米部の勇士共が、頭椎石椎の劔を以て討たねばやまない。さあ今討つがよからうといふのであります。

金色の八咫鳥



かくて神倭伊波禮毘古命は次第々々に各地の酋長共を討ち従へられましたが、まだ那賀須泥毘古（長髓彦）が非常な勢力を張つて待ち構へてをります。そこでいよく那賀須泥毘古を討つて、五瀬命の警を復し、この國を平定しようと御決心をなさいました。

先に那賀須泥毘古をお討ちになつた時には、日の神に向つて戦つたのでよくなかつたといふので、今度は日の神を後にして、その威光を受けて進まれました。しかし那賀須泥毘古の軍勢は非常に強くて、皇軍は容易に勝つことが出来ませんでした。ところが或る日の對戦中のこと、今までよく晴れてをつた空が俄に掻き曇つて大きな雹が降り出しました。これが爲めにあたりは真闇になりました。折しも例の天色

に光つた八咫鳥が飛んで来て神倭伊波禮毘古命の御弓の先に止まりましたので、あたりはバツと明るくなりました。皇軍はこれに勢を得て攻め立てましたので、那賀須泥毘古の軍勢は一たまりもなく敗北しました。

先に那賀須泥毘古をお撃ちになつた時に、五瀬命が敵の矢に中つてたうとうお崩れになつたのでありますから、神倭伊波禮毘古命はどんな事があつても那賀須泥毘古を討ち滅さねば置かないと堅い御決心をせられたのであります。そこでその御心を部下の者共に知らさんとして歌を詠まれました。その歌、

みづくし久米の子等が、

粟生には菲一本、



其根が莖、其根芽繋ぎて、

撃てしやまん。

この歌の意味はみづくしい久米部の勇士等が作れる粟の生えてを  
中に交れる韭一本、その根と莖と芽とが繋つてをるやうに、那賀須  
泥毘古とその黨類とを一所にして残らず撃ち滅さねば止まぬといふの  
であります。

みづくしい久米の子等が、

垣下に植ゑし薑

口ひいく吾は忘れじ、

撃てしやまん。

この歌の意味のみづくしい久米部の勇士等が、垣下に植ゑた薑  
を噛むと口の中がひりつくやうに、吾は五瀬命が矢に中つてお崩れに  
なつた怨みを忘れない。だから那賀須泥毘古を撃たねばやまないとい

ふのであります。

神風の伊勢の海に、

大石に蔓延廻ふ、

細螺のいはひもとほり、

撃てしやまん。

この歌の意味は神風の吹く伊勢國の海の大きな石に澤山まとひ附い  
てをる細螺貝のやう、那賀須泥毘古の軍を隙間もなく取り圍んで撃つ  
てしまはねば止まないといふのであります。

神倭伊波禮泥古命の心意氣はかういふ風でありますし、それに天祐  
を得た皇軍の勢は非常なものであつたから、那賀須泥毘古の軍はだ  
んくに勢を失つてしまひました。

この時那賀須泥毘古の許に邇藝速日命（饒速日命）といふのがをら



れました。今度那賀須泥毘古の軍が散々な敗北をして歸つて來たのを御覽になりました。

どういふ譯であるか。

とお尋ねになりますと、

天神の御子が今度この地にお降りになつて盛んに各地の酋長共を討ち滅し、たうとうこゝまで攻めて來られました。それを防がうとして、かゝる散々な敗北をいたしたのであります。

といふことであります。

邇藝速日命は天神の子であるが、早くから大和國に降り那賀須泥毘古と共に、この地方を平定せられてをつたのであります。

今天神の御子がお降りになつたといふことをお聞きになつて、先づ那賀須泥毘古を説いて歸順するやうにお進めになりました。しかし那賀須泥毘古はどうしても聞き入れませんでした。邇藝速日命も那賀須泥毘古を殺すといふことは情に於て忍びないことではあるが、さりとて天神の御子に向ふことは尙更出來ません。そこでたうとう那賀須泥毘古を殺して、神倭伊波禮毘古命の許にお出でになりました。

私は天神の子孫でございますが、今度天神の御子が天降りましたと聞きまして、やつて参りました。

と申し上げて、那賀須泥毘古の首を奉つて歸順せられました。

神倭伊波禮毘古命は那賀須泥毘古の首を御覽になつて非常にお喜び



になりましたが、邇藝速日命が天神の子孫であるといふことが、確かに分りませんので、

何か天神の子孫であるといふ證據でもあるか。

とお問ひになりました。邇藝速日命は天羽々矢と歩鞞とお見せになりました、

これがその證據であります。

と申し上げました。

それは神倭伊波禮毘古命がお持ちになつてをるものと、少しも違はないものであります。そこで邇藝速日命に一軍の將として忠節を盡すやうにとお頼みになりました。その子孫は後に物部氏といつて、代

々軍事に従つてお仕へ致してをります。

橿原宮

神倭伊波禮毘古命は到る處の酋長共を討ち従へられました。大和地方は全く平定して服従しない者は一人もありませんでした。そこで大和國畝火山の麓の橿原宮におはしまして、天下をお治めになりました。かくて天照大御神の詔の通り天地と共に限りなく榮え行く大日本帝國の基は堅められたのであります。

神倭伊波禮毘古命は天子の御位に即かれてからは神武天皇と申し上げますので、又始馭天下之天皇とも申し上げます。そして神武天皇を人皇第一代とし、その御即位の年を紀元元年とするのであります。丁度



これが今年大正七年から二千五百七十八年前の事でありませう。

—(終)—

大正七年十一月二十日印  
大正七年十一月廿三日發行

定價金五十錢

神様の奥付  
太古の神話  
不許複製

著者	大西貞治
發行者	東京市牛込區富久町十六番地 長嶺松
印刷者	東京市神田區表神保町一番地 安田徳治郎
印刷所	東京市神田區表神保町一番地 健捷堂

發行所 東京市京橋區本八丁堀二丁目一番地

飛行社  
電話東京橋三七八七番  
振替東京二六三三〇番



新刊

# 新しい文章の作り方

四六判美装  
定價七十錢  
郵税六錢

〔東京日日新聞〕

文話篇、文體篇、文章篇に分ちて中學程

度の學生若くは小學卒業程度の青年の爲めに文章稽古の要領を説いたもので、極めて要領を得た好著である。

〔時事新報〕

坊間に行はるゝ作文書類中には徒らに作例のみ

多く其の範例を如何に觀るか、又其等の素材を如何に運用すべきか、其等の要點を一向に示さぬ者あり、然るに本書は單刀直入其等の諸點を解説し一讀直ちに作文の奧秘を知得せしめんが爲めに努力せり、青年諸子の良師友。

早教 大授  
西貞治先生著  
大西貞治先生著

東京市京橋區目黒丁八  
飛鷹社  
振替東京電  
六三三七番  
三三七八番



31  
819



終

